

## 女子短大学生の職業選択と自己同一性の獲得 (2)

——学生の職業的な自己同一性の状況と自尊感情・性役割感・家族構成の分析——

大久保 純一郎

職業選択 (Vocational decision-making) は、青年期の自己同一性獲得過程において、最も重要な課題のひとつであり、数多くの研究がなされている。

職業選択は、自己同一性獲得の最も重要な要因であると考えられる。しかしながら、近年の日本の青年 (特に大学生) の場合、必ずしも自己同一性の確立が十分でないままに、卒業というかたちで職業選択を強いられることが多い。そのためか、卒業後、進学もせずとも一定の職業にもつかない「フリーター」層の数が増加し続けている。さらに、いったん就職しても早期に退社する例や、「出社拒否」に陥る例なども増加し、社会問題化しつつあるといえる。

下山 (1992) は、日本の4年制大学生のモラトリアムの状況を分析した。受験などによる管理体制が強固な日本社会の特殊性を考慮し、次のような考察をした。1) 日本の大学生の場合、「大学入学後に職業決定を積極的に延期し、その延期した期間に思春期の発達課題である自由な役割実験を行」い、自己同一性の基礎・確立に結びつと考えられる。2) 逆に、職業決定課題を回避することで、心理的な混乱を防いでいる場合は、さまざまな自己同一性の障害や未成熟が予想されると考察した。

他方、女子短期大学生の場合は学生生活は2年間しかないため、下山の考察したような状況はより切実な問題となる。就職活動は1年次の終わりころから、開始されているのが現実である。4年制大学生と比べるときわめて早期であり、その時点での自己同一性の確立は困難な状況で、職業選択も困難となっているのではないかと考えられる。さらに、就職後の職業維持にも問題があるのではないかと考えられる。そこで、著者は現代の女子短期大学生の職業選択の過程について、自己同一性の獲得や精神的な病理の観点から継続的な研究を開始した。

大久保 (2002) は、女子短期大学生のモラトリアムの状況や自己同一性の状態を、下山の方法にしたがって測定・分析し、さらにそれぞれの学生の理想とするライフコースとその母が実際に歩んだライフコースを調べ、モラトリアム・自己同一性の様子と比較した。被験者の半数ほどは、自己同一性の獲得に向けて模索中か、潜在的な力はあるながら積極的なモラトリアムにあるといえる。しかし、残りの半数は未熟な状態であり、さらにその半数は自己同一性の混乱状態を予測させるものであった。これらの学生に対するケアが急務であると考えられた。また、自己同一性の状況とライフコースの分析では、専業主婦型のライフコースを希望する学生は、職業的自己同一性が混乱していることが多いと考えられた。母のライフコースとの関係について分析したところ、母のライフコースによって、職業的自己同一性の確立に大きな差はみられなかった。ただし、母が職場復帰型である場合、本人の得点は「回避」が低く、「確立」

が高く、職業的自己同一性の状況はもっとも安定していると考えられた。

本論文では、自尊感情、性役割観、家族関係に着目して、女子短期大学生の職業自己同一性のあり方について分析した。

自尊感情 (self-esteem) とは、人が持っている自尊心 (self-respect)、自己受容 (self-acceptance) などを含め、自分自身についての感じ方をさし、自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚-感情-である (遠藤, 1992)。あるいは、自己の価値や能力に関する自己評価であり、自分自身の価値・有能感を感じる程度であるといえる (川西, 1995)。近年、自尊感情をめぐる様々なところの問題が生じているといえる。例えば、競争社会の中で、適切な自己評価が出来ず、低い自尊感情しか持ち得ない青年達の一部で、引きこもり、摂食障害をはじめとする様々なところの問題が引き起こされている。また、現実の自己とは不釣り合いに高い自尊感情を持った青年が現実と対峙した場合におこるであろう軋轢がさまざまな問題行動や犯罪に関係しているのではないかと考えられている (町沢, 2000)。自尊感情は、自己同一性の獲得とも関係していると考えられる。そこで、本研究では、自尊感情の程度と職業的自己同一性の獲得との関係について検討する。

自尊感情の獲得に性差はないといわれているが、性役割感について検討すると、高い自尊感情を持つ者は両性的であり、自尊感情の低い者は、女性性も男性性も持ち得ていないと言われる (遠藤, 1992)。また、職業決定に関しては、男性性の高い者が職業決定をしやすい傾向にある (若林・後藤・鹿内, 1984; 若林・伊藤, 1985)。そこで、本研究では、性役割感と職業的自己同一性、自尊感情との関係についても検討した。

研究 I では、女子短期大学生の職業モラトリアムの状況を、下山の方法にしたがって測定・分析し、さらに自尊感情や性役割感についても測定し比較検討した。

さらに、家族関係については、さまざまな人格特性やところの問題に関係していると考えられる。青年期における女性のところの問題において、青年の母への感情や、母の青年に対する態度などの母子関係が重要な役割を果たしているといえる (大久保, 2001)。また、母のライフコースと短期大学生の職業的自己同一性の状況になんらかの関係性が見られた (大久保, 2002)。研究 II では、職業モラトリアムの状況を測定し、それぞれの被験者の家族形態と比較検討した。

## 研究 I：自尊感情・性役割感と職業的モラトリアム

### 方 法

**被験者** 短期大学部に所属し、生涯発達に関する講義を受講した 1 年生の女子学生 70 名を対象とした。

**質問紙** モラトリアム尺度、自尊感情尺度、そして性役割感尺度を用いた。

1) モラトリアム尺度：大学生の職業的自己同一性をモラトリアムの状況といった観点から分析する質問紙である。24 項目からなり「回避」, 「拡散」, 「延期」, 「模索」の 4 下位尺度に

わけられる（下山，1992）。これらは，モラトリアムの状態を示すが，同一性地位（Identity Status: Marcia, 1966）とも関係している。今回の分析では，下山（1986）の職業決定尺度も同時に実施した。これらは3件法で実施した。

2) 自尊感情尺度：Rosenberg（1967）による自尊感情尺度の日本語版（井上祥治，1992）を用いた。10項目からなるガットマン・スケールである。評定は4件法で実施した。

3) 性役割感尺度：伊藤（1978）が M-H-F scale として作成した30項目からなる質問紙を用いた。本研究では，それぞれの特性が自己に当てはまるかどうかを評定し，被験者の自己の性役割感を測定した。尺度は女性性，男性性という性役割概念とともに，女性・男性ともに重要な重要な特性として人間性の因子を測定する。

手続き 生涯発達に関する講義において，理解を深めるための課題として質問紙を実施した。第1回目にモラトリアム尺度，第2回目に自尊感情尺度，性役割感尺度の評定を実施した。

## 結 果

表1に，各質問紙の下位尺度間の相関係数を示した。

モラトリアム尺度 モラトリアム尺度の各下位尺度間の相関係数について検討する（ $n=70$ で，5%水準で有意な相関係数は，.159である）。「回避」は，「延期」と有意で強い相関を，「拡散」とは有意であるがゆるやかな相関を示している。「回避」は，職業的同一性の確立を意味する「決定」とゆるやかであるが有意な負の相関があった。「拡散」や「延期」も，「決定」とゆるやかであるが有意な負の相関があった。その他の相関は有意では有意ではなかった。

モラトリアム尺度と自尊感情尺度 自尊感情尺度は，「回避」と有意性傾向水準の相関があった。「決定」とは有意であるがゆるやかな相関があった。

モラトリアム尺度と性役割感尺度 性役割感尺度とモラトリアム尺度の間にはほとんど相関関係は見られなかった。ただ，「決定」と男性性の間に有意で，比較的はっきりした有意な相

表1 モラトリアム尺度，自尊感情尺度，そして性役割感尺度の相関係数

		モラトリアム尺度					性役割感尺度			自尊感情尺度
		回避	拡散	延期	模索	決定	男性性	人間性	女性性	
モラトリアム尺度	回避	1								
	拡散	0.263*	1							
	延期	0.658**	0.143	1						
	模索	-0.224 <sup>+</sup>	0.195	-0.185	1					
	決定	-0.407**	-0.297*	-0.363**	-0.019	1				
性役割感尺度	男性性	-0.166	-0.172	-0.100	0.038	0.472**	1			
	人間性	-0.017	-0.009	-0.010	0.206	0.003	0.383**	1		
	女性性	0.042	0.014	0.037	0.040	0.027	0.273*	0.507**	1	
自尊感情尺度		-0.213 <sup>+</sup>	-0.137	0.066	0.165	0.248*	0.349**	0.386**	0.347**	1

<sup>+</sup>p<0.10; \*p<0.05; \*\*p<0.01

関関係が見られた。

## 考 察

短期大学生の職業的自己同一性の状況と自尊感情・性役割感について分析を行った。性役割感では、職業的自己同一性の「決定」下位尺度と性役割感の男性性尺度の間に比較的強い相関関係が見られた。自分自身に対して男性的イメージをもつ者が、職業的自己同一性の獲得の程度が高いといえる。若林・後藤・鹿内（1984）は、自己イメージと職業決定の研究において、自分に対して伝統的な男性的イメージを持つ女子短期大学生は、達成を求める傾向が強く、職業決定が早いと述べている。本研究結果は、若林らの結果と一致するものである。

自尊感情についても、職業的自己同一性の「決定」下位尺度と有意であるがゆるやかな相関が見られた。職業的自己同一性の決定と自尊感情の間に明らかな関係があるといえる。自尊感情の高い者が職業的自己同一性を獲得しやすいといえるのか、逆に職業的自己同一性の確立した者が自尊感情を高めることが出来るのかは不明であり、これからの研究課題である。

## 研究 II：家族形態と職業的モラトリアム

### 方 法

**被験者** 短期大学部に所属し、生涯発達に関する講義を受講した1年生の女子学生75名を対象とした。

**質問紙** モラトリアム尺度を用いた。

**家族関係** 同居する家族構成員について聞いた。家族形態、同胞順位、同胞構成についてチェックした。それぞれ表2のように分類した。

**手続き** 生涯発達に関する講義において、理解を深めるための課題として質問紙を実施し、

表2 家族関係のデータ

変数	カテゴリー	人数	規 準 など
家族形態	核 家 族	49	両親と同胞のみの家族
	拡大家族	26	核家族にそれ以外の成因が同居している
同胞順位	一 人	7	同胞はいない「一人っ子」の場合
	末 子	37	同胞中最年少である場合
	長 子	19	同胞中最年長である場合
	中 間 子	12	同胞中最年長でも年少でもない場合
同胞構成	一 人	7	同胞はいない「一人っ子」の場合
	男 性	30	同胞は男性（兄弟）のみの場合
	女 性	31	同胞は女性（姉妹）のみの場合
	男 女	7	同胞に男性も女性もいる場合

家族構成についてもきいた。

## 結 果

家族形態，同胞順位，同胞構成のそれぞれのカテゴリーごとにモラトリウム尺度の下位尺度得点の平均を算出し，カテゴリー差について一元配置の分散分析をおこなった。すべての場合において有意な主効果は見出せなかった。この結果は，カテゴリーごとの人数差が大きいためと考えられた。

**同胞順位** そこで，同胞順位では「一人」のカテゴリーを除いた上で分散分析を行った。その結果，「拡散」下位尺度において主効果に優位な傾向が見られた ( $F=2.41$ ,  $df=2,65$   $p<.10$ )。多重比較 (Duncan の法,  $\alpha=.05$ ) を行ったところ，長子の拡散尺度得点は中間子より大きい，その他の対では有意な差が見られなかった (図 1)。

**同胞構成** 次に，同胞構成では，「一人」と「男女」の数が極端に少ないので，男性と女性の 2 カテゴリーの比較を行った。その結果，「決定」下位尺度においてのみその差に有意な傾向が見られた ( $t=1.98$ ,  $p<.10$ ; 図 2 参照)。同胞が男性であるほうが，「決定」得点が高い傾向があるといえる。

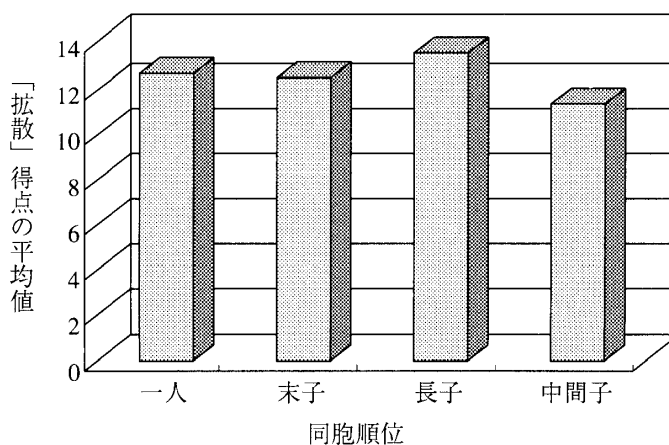


図 1 同胞順位別にみた職業的自己同一性「拡散」得点

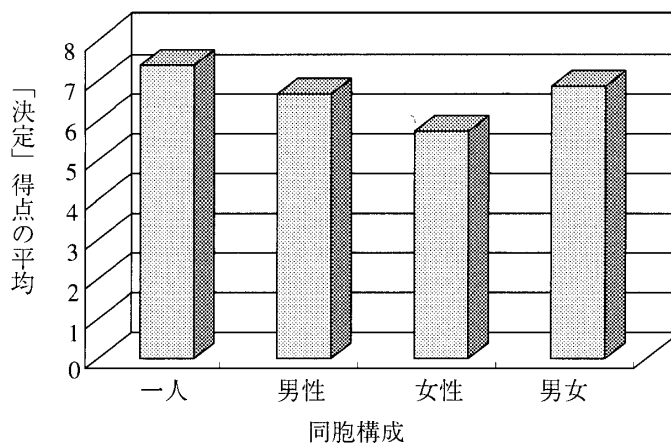


図 2 同胞構成別にみた職業的自己同一性「決定」得点

## 考 察

家族構成と職業的自己同一性の間には明確な関係は見出せなかったが、職業的自己同一性の「拡散」は、長子（同胞中最年長の場合）は最も高くなり、中間子（最年長でも、最年少でもない場合）に最も低くなる傾向が見られた。大久保（2001）によると、「拡散」の高いものは自己同一性の獲得はもっとも「不十分で、精神的未熟や混乱も予想される」と考えられる。長子の場合、このようリスクが大きいのではないかと考えられる。

同胞が男性、つまり兄弟のみの場合に、「決定」得点が高くなる傾向が見られたが、この結果は、男性性と「決定」が相関するという結果と一致する。すなわち、男性の同胞がいる場合、何らかのかたちで男性性の獲得が促進されているのではないかと考えられる。

本研究では、家族構成と職業的自己同一性の関係について検討したが、職業的自己同一性の一部は、同胞関係に影響を受けることが見出された。

## 総 合 考 察

短期大学生の職業的自己同一性の状況と自尊感情、性役割感、家族構成の関連性について分析を行った。職業的自己同一性の決定にはさまざまな意味で男性的性役割感が重要な役割を果たしているようである。若林・後藤・鹿内（1984）は、男性性に見られるような「達成的モチーフ」が職業選択過程を早くしたと述べている。職業選択を達成行動としてとらえるならば、一時的にでも男性的方略を用いることによって、職業選択を円滑にすることができるといえる。そのためには、戦略的に自己の行動様式を変更せねばならず、その前提としてより確立した自己同一性が求められる。現在の女子短期大学生の自己同一性の状況を考えると、未熟で不安定な者も多く（大久保，2002）、一人一人の自己同一性の確立を目指した関わりが必要であり、その上に立った就職指導が必要であろう。

また、自尊感情も職業的自己同一性の状況に大きな影響を及ぼすことが見いだされた。達成的モチーフと同様、自分自身の行動への自信が職業選択過程を円滑にしていると考えられる。また、自尊感情が自己同一性そのものの確立に大きく関与しているといえる。先に述べたような自己同一性獲得への関わりを中心課題として、自尊感情の確立が位置づけられるといえる。

## 引用文献

- 遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽（編）セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—ナカニシヤ出版。
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 町沢静夫 2000 自尊心という病—自尊心の傷つきに耐えられない少年たち—双葉社。
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 岡本祐子 1995 青年期における意志決定 落合良行・楠見 孝（編）講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期—金子書房。
- 大久保純一郎 2001 青年期女性のこころの健康と人格発達 (1)—チャム形成、母への愛着、そし

- て原因帰属の影響－帝塚山大学短期大学部紀要, **39**, 33-41.
- 大久保純一郎 2002 女子短大学生の職業選択と自己同一性の獲得 (1)－学生の職業的なアイデンティティ・ステータスと母のライフコース－帝塚山大学短期大学部紀要, **40**, 33-41.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 下山晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究－アイデンティティの発達との関連で. 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1984 女子大学生における職業選択課程の予備的研究 (1)－就職決定群と未決定群の比較をもとに 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **31**, 123-161.
- 若林 満・伊藤雅子 (編) 1985 女性は自立する 福村出版.